

アメリカン・ボード宣教師文書

——同志社女学校女性宣教師を中心として——

〈M. F. デントン書簡一訳および註一〉(5)

阪 上 敦 子 監訳
 樫 本 尚 美
 小 島 紀 子
 矢 吹 世紀代
 吉 岡 弘 子
 松 波 満 江
 小 林 弘 美

〈クラーク書簡 C-21〉【樫本尚美 訳】

1894年2月8日

拝啓 デントン様

この手紙は、そちらの学校の女生徒を支援する目的で奨学金15ドルが太平洋ウーマンズ・ボード¹南部支部から送られて来たことを報告するものです。

どうぞよろしく。

敬具

N. G. クラーク

B.²

1. 原文では the W.B.M.P. と表記。the Woman's Board of Missions for the Pacific の略。ウーマンズ・ボードはアメリカン・ボードと協力して活動する女性

伝道局で、東部・中部・太平洋の3地域に分かれて活動した。同志社女学校最初の校舎の募金はウーマンズ・ボード全体の事業として提唱されたが、その後は主に太平洋ウーマンズ・ボードが同志社女学校の支援をすることになった。

2. タイピストのイニシャルか。同様のBは [C-23] [C-24] にも見られる。

〈クラーク書簡 C-22〉【小島紀子 訳】

口述筆記によるもの

1894年2月21日

拝啓 デントン様

この問題について私宛てのジュエット夫人¹の手紙への返事として書いたばかりのものの一部を同封します。また、この事態の推移がお分かり頂けるように、彼女宛のあなたの手紙も同封しています。この時期にあなたが変則的なやり方でこの仕事²を始めてしまわれたことを非常に残念に思います。しかし、いずれきつとアメリカのミッション・ボードの決定に心から同意されて、日本での伝道活動の中心となる女子を教育する別の方法を見つけて下さることでしょう。アメリカで教育を受けた外国からの学生が、自らの仕事の現場へ戻った時に、際立っては成功できないことは経験上からわかっているのです。これは伝道の領域の多くで顕著な事実です。

敬具

N. G. クラーク

1. ジュエット夫人 前出〈C-11〉

2. 具体的にデントンがどんな仕事を企てたかは確認できないが、前便にもあるように、松田道がジャパニーズ・スカラーシップを得て留学することになったこと、その奨学金には渡航費は含まれていないので、デントンがウーマンズ・ボードを介さずその費用を募金しようとした可能性は大きい。

〈デントン書簡145〉【矢吹世紀代 訳】

日本 京都 同志社

1894年3月1日

拝啓 クラーク博士

1893年10月17日付タルカット¹さん宛のお手紙の中で、「新島文庫」²のためにウーマンズ・ボードから15ドルの寄付があったとあなた様からお知らせをいただきました。タルカットさんはその寄付金を私に渡して下さいました。寄付をして下さった寛大な方々の温かいお気持ちに、心からの謝意をお伝えしたいです。あなた様からどうぞよろしくお伝えください。ご存じのとおり、この文庫の事業は私にとってたいへん大切なことですので、ウーマンズ・ボードの方々がこのような形で関心を示して下さいましたことに本当に感謝申し上げます。何人かの日本人の友人にこのことを話したら、その寄付金は日本語の書籍の購入に使ってもよいのかと尋ねられました。そこで、学内の理事会に相談したところ、英学校では原則として外国からの寄付金は英語の書物の購入にいつも充てているとわかりました。原則がそうですので、寄付された方々から日本の書物の購入をとの希望がなければ、その原則に従うのがいちばんでしょう。英語の書物はたくさん無いと困りますし、特に参考図書が必要です。寄付して下さった方々とどんな本が買えるかご相談できれば一番いいのですが、何よりも新しい『センチュリー辞典³』が欲しくてたまりません！その辞書は、生徒たちが多くの時間をとる文法的なポイントがうまく解説されていてとても貴重な本です。しかし私たちにはとても手が届きそうにないと諦めています。でももし寄付して下さる方がこの辞書の購入に前向きで、レヴィットさん⁴が出版社から最安値の見積もりを取って下さったら、他の人たちもその辞書の入手に興味を持ち、私たちを手助けしようという気になって下さるのではないのでしょうか。価格はこの2～3年の間に間違いなく安くなるはずですが、私は今すぐに欲しいのです。もし辞書を買えるようになるのであれば、早ければ早いほどいいのです！そして何と

かして辞書を入手するめどが付いたなら、すでにウーマンズ・ボードの私の口座にある16ドルをレヴィットさんに使って頂くにはこの手紙だけで十分ではないでしょうか。

デービス博士へのあなた様の最近のお手紙を大変興味深く拝見いたしました。その書簡には、^{Boys' School}英学校の生徒の支援のためには YCMA⁵のメンバーにどうしたら興味を持って貰えるか、ご子息の案が書いてありました。同じような関心を^{Girls' School}女学校にも示して下さる方がいればいいのに… (Girls の“G”が大文字なのがお分かりでしょう!)。日本の反動期⁶以降、アウトステーション [出張伝道地] の学校で英語を教えたり、日本語がまだ十分できない宣教師を助けて通訳をしたり日本語を教えてくれたり、また福音伝道の仕事全体の手助けしてくれるような女子がもっと欲しいとの声がずっとありました。それはこれまでに送り出した卒業生数以上に、ということです。これまでも、たくさん女子を受け入れたかったのですが、支援するための資金不足もあり、断らざるを得ませんでした。1人の女子を支援するには年間で多くて40ドルかかります。しかし、日本での伝道では彼女たちが最も大きな要因になっていますし、これからもなるだろうとの確信はますます強くなっています。女性は男性のように目新しく未知の教えをどれも追いかけるようなことはしませんし、長い目で見れば、変わり身の早いこれら男性よりも影響力は大きいのです。

ちょうど神戸女学院を訪れて気分よく戻ってきたところですが、そこで行われている良き働きが強く印象に残りました。嬉しかったのは、一般の学校ではここ5年ほどの間に人気を得ようとしてあらゆる面で変わってしまっていますが、あの学校ははっきりとした方針を唯一堅持し続けている学校であったことです。これまでと同じく、今もその方針を私たち宣教師自身が持ち続けていることこそが賢明であり、その影響と働きは私たちが思っている以上に大きいと確信します。それにこの学校 (同志社女学校) でも成就しつつある特別な働きがありますし、日本はこうした女生徒たちに感化されてよりよ

い国になっていくだろうと感じております。もう余白があまりなくなりましたが、デフォレスト⁷夫妻には多くの点で好感を抱いておりますし、博士の御尽力のお蔭で神戸女学院はととも成果を上げてきていることを付け加えさせて下さい。生徒たちの数々の疑問や質問に答えられることで博士は力添えをして来られたのです。

敬具

メアリー・フローレンス・デントン

ウーマンズ・ボードにもこの手紙を回していただくようお願いいたします。

1. Talcott, Eliza (1836-1911) 1873年に Julia Elizabeth Dudley (1840-1906) と共にアメリカン・ボードから日本に派遣された最初の女性宣教師。日本女性への伝道と教育のため、神戸花隈村に私塾「神戸ホーム」開校。1879年、神戸英和女学校と改称される。これが現在の神戸女学院の前身となる。
2. 1892年9月に設置された女学校の図書館。改革により設けられた2年制の専門科生（師範科、文学科、神学科）は卒業論文が課せられたため、図書館の充実が必須であった。同志社図書館の借覧はできたが女学校にも独自の図書館が必要であった。
3. *The Century Dictionary and Cyclopedia* 1889年から1891年にかけて New York の The Century Company から出版された7046頁で約10,000の木版図版が付いた百科事典的な英語大辞典である。言語学者でイェール大学教授 William Dwight Whitney (1827-1894) が編集責任者を務めた。*Oxford English Dictionary* の出版までは最大の英語辞典であった。
4. Leavitt, Horace Hall (1848-1920) 1873年アンドーヴァー神学校卒業、同年来日し、大阪で伝道を開始する。梅花女学校の設立などを指導するが、極端な日本教会自給論を展開してミッションと対立。1883年本国に召還される。成瀬仁蔵の米国留学の世話もする。
5. YCMA は YMCA のことか。Young Men's Christian Association (キリスト教青年会) の略。1844年 George Williams (1821-1905) ら12名のキリスト教青年によりロンドンでキリスト教徒に限らず青年への啓蒙や生活改善のための奉仕組織として設立。日本では1880年、東京 YMCA が設立されて初代会長に小崎弘道が就任。このとき初めて小崎が Young Men を「青年」と訳す。
6. この時期、日本の社会全体がこれまでの行き過ぎた西洋化に対する反動期であった。1889年の大日本帝国憲法に続いて1890年には教育勅語が発布されて、とりわけ

女子教育及び西洋的カリキュラムに対する牽制が強まった。

7. DeForest, John Kinne Hyde (1844-1911) 1868年にイエール大学、1871年に同大学神学部を修了。その後、ニューヘイブンで牧師をした後、アメリカン・ボードの宣教師として1874年新島襄と共に来日、大阪で伝道する。1886年仙台の東華学校の教師となり、仙台を中心に東北地方の伝道、教育に当った。

〈クラーク書簡 C-23〉【矢吹世紀代 訳】

1894年5月7日

拝啓 デントン様

わずかではありますが、カリフォルニア州ペリス市の女性伝道会¹から女学校の生徒のためにと5ドルの寄付金があったことをお伝えします。

この報告がてら少し書き加えさせていただきますと、あなたのご担当の女学校が今学期どういう状態にあるのかとても気になっております。マイヤーさん²が京都を離れて以来、女学校については何も聞いていません。彼女からは1、2度手紙をいただいて、ドイツやチューリッヒで勉強中と聞いています。マイヤーさんは日本に戻るかどうかまだ決めかねているようですが、もう戻らないのではないのでしょうか。帰任に関してはこの2～3ヶ月踏ん切りがつかない状態なので、これ以上強く勧めない方がいいでしょう。

数人の関係者から学校はうまく管理されていると聞いております。マイヤーさんの仕事をきちんと引き継ぎ、スムーズに事が進んでいると大いに信頼されているようですね。どのような支えを得たのかはわかりませんが、最後に聞いた話では、ベネディクトさん³があなたを助けて女学校の世話をすることになったようですね。彼女が素晴らしい資質の持ち主であることを思い起こしていますが、もうそろそろ日本の生活や仕事にも馴染んで、十分にあなたの助けとなってくれているでしょうし、全て順調だと信じております。彼女が宣教師になる決心をせず、そしてきちんと手続きを取らなくても1、2年はこのままでいたいのかもしれません。ベネディクトさんの出す結論も気になりますが、どんな手助けが必要なのか、あなたから聞かせて頂きたいで

す。もしふさわしい資質を持った若い女性をもう一人本国から派遣する必要
があるならこちらでも人材を探しますから、できるだけ早く知らせていただ
ければ有難いです。

あなたと、ベネディクトさんにくれぐれもよろしく。

敬具

N. G. クラーク

B.

1. 原文では Woman's Missionary Society. 内外の伝道を助ける会でアメリカ各
地の教会にあった。
2. マイヤー 前出 (C-15)
3. Benedict, Harriet Miriam (1856-1938) 米国ウィスコンシン州出身。1892年
11月来日。1894年5月から96年11月まで同志社女学校で教える。1900年5月帰国。

〈クラーク書簡 C-24〉【吉岡弘子 訳】

1894年8月20日

拝啓 デントン様

今朝は、太平洋ウーマンズ・ボード¹のカリフォルニア州オークランド支
部よりご担当の生徒への特別献金10ドルを受け取ったことをお知らせします。

敬具

N. G. クラーク

B.

1. 太平洋ウーマンズ・ボード 前出 (C-21)

〈バートン書簡 B-1¹〉【松波満江 訳】

1896年11月20日

拝啓 デントン様

私が日本から帰国して以来²、まだお便りは頂いていないと思います。ですが、私も出したかどうか定かでないので、ご報告が無くてもあなたの方に弁明の余地は十分にありますね。しかし私個人としても、あなたの個々のお仕事に関心を寄せていることをご理解いただきたいですし、ボードとしても、男性の仕事と同様に、独身女性の仕事にも深く関心を寄せていることを知ってもらいたいです。ウーマンズ・ボードの傘下で働いておられる間はアメリカン・ボードの一員ですのご報告を頂きたいのです。

同志社理事会が騒動を起こし³、女子部からの撤退を強行したのは多くの点で残念でした。結果的には実際に女子部も含まれましたが、計画の段階では女子部は撤退しないと聞いていました。理事会に出した私の手紙でも、理事会にはそのつもりは無いのだから、我々が女学校での仕事を続けていいとの通知を頂ける機会は十分に差し上げていたのですが、これについてはまだ何も言ってきていません。

他の方々から女性宣教師たちも学校を離れ、そしてあなたは市中伝道をしておられると聞きました。これまで同志社と共に行って来られた教育は立派な仕事であったと十分に評価し、さらに宣教師たちが同志社理事会と連携して遂行して来られた共同事業の最後の部分は彼らに譲って、今、私たちの仕事は同志社を離れて別にあるということに満足していると認めざるをえません。こうすれば摩擦の種は取り去られ、同志社とアメリカン・ボードをより調和のとれた未来へと導くだろうと思います。

京都での新しいお仕事のことをどうかお聞かせ下さい。京都の女性たちの心に届き、将来まで継続していける仕事を始めるチャンスがたくさん見つけておられることは間違いないでしょう。

お便りをお待ちしております。

敬具

ジェームズ L. バートン

1. Barton, James Levi (1855-1936) 米国バーモント州シャーロットにてクエーカー教徒の子として生まれる。1881年ミドルバリーカレッジ卒業後、ハートフォード神学校へ進学。1885年、海外伝道に関心を持ち妻とトルコへ向かうが、7年後妻の病のため帰国。1894年アメリカン・ボードの幹事 N. G. Clark の引退を受けて幹事に就任。この書簡は就任後初のデントンとの交信である。
2. 1895年、同志社とミッションとの衝突を憂慮したアメリカン・ボードは、エリソン、バートン、ブラッドフォード、ジョンソンの4名からなるボード派遣委員を日本に派遣。10月1日に来日して約2ヶ月にわたって関係者と折衝を続けたが、交渉は決裂。日本からの帰国はその時のことをさすものと思われる。
3. 1896年4月、同志社理事会はこの年を最後にアメリカン・ボードからの寄付金、教員を謝絶することを決議。ミッションはそれよりも早く、年度末である1896年6月に引き上げることが賢明と判断。デントンも他のアメリカ人宣教師と共に同志社を退去した。

〈デントン書簡146〉【小林弘美 訳】

京都 梨木町

1896年12月14日

拝啓 バートン博士

ゴードン夫妻¹の辞任の意向が書かれている手紙を受け取られ、私たちと同様にきっと狼狽しておられることでしょう。ご夫妻がこのようなお気持ちになられた理由を少しお話して、是非ともお二人がミッションに残れるように運営委員会に働きかけをお願いいたします。ゴードン博士には伝道の仕事へのまれに見るすばらしい適性がおありで、博士がライフワークからの撤退を考えられるとどんなにか深く心を痛めておられるか、今さらお話しする必要もないでしょう。「家庭の事情」についても、ゴードン家の方々とはこれまでずっと懇意にさせていただいていましたので、私の知っている範囲で申し上げますと、お二人は別の案を申し出られたかったのですが、ボードの財政

状態の重荷となることを憂慮して、その申し出をやめられました。夫人が3年前に帰国されたときには、メアリー²の入学の時期になって帰国が必要になったらすぐに米国へ戻ってもよいという許可をクラーク博士から頂いておりました。ご存じのように、ドナルド³はハーバード大学に在籍していますが、ご夫妻はどちらも今ドナルドには親の、特に母親の感化が必要だと感じておられます。

もしボードの財政的な緊迫を気にされないなら、ご夫妻は喜んで仕事に留まられ、夫人は来年1897年7月か8月にメアリーと一緒に帰国されて、博士は夫人の帰国後1年ほどしてから1年間の休暇を取られるでしょう。メソジスト派、聖公会、長老派教会のミッションが単に5年か7年の任務を求めていることを考えると、前回着任⁴の5年後に博士が帰国できないわけはありません。

さて、親愛なるバートン博士、次のようなことを提案していただけないでしょうか。すなわち夫人が初秋にメアリーと帰国し、ゴードン博士は1年余りここ〔京都〕に留まって、それから休暇をとるという案です。博士は学校再建のこの期間にはこちらで大いに必要とされておられて、実際、彼なしではどうしてやっていけるでしょうか。博士は大変日本語が堪能で、かつ仕事やミッションに大いに靈的な意気を高めて下さる方なので、彼なしではやっていけません。次の一点だけを考慮しても、つまり、博士がバートレット夫妻⁵の大きな力となって下さること、そしてご夫妻はゴードン夫人がお留守の間、博士に心の安らぐ場所を提供できることが挙げられます。このような提案をゴードン夫妻がお出しにならないのは、ボードの財政的重荷を慮っておられることと、果たされているお仕事の価値を過小評価されているからであり、ミッションとしてもご夫妻には何としても留まって欲しいときと説得するだろうと確信しています。

もう一つお願いがあります。敬愛するリンダ J. リチャーズさん⁶(コネチカット州ハートフォード、ハートフォード病院)のことはご存じないですよね。

彼女なら、喜んで助けに来てくれると思うのです。出来ましたら、彼女の来日が可能になるような努力の余地があるかどうか確かめて下さると有難いのですが。リチャーズさんはどんな場所でも当てはまる方でしょうが、特にアウトステーション [出張伝道地] のお仕事で力を発揮されるでしょうし、彼女の日本語力も考慮に入れるべき素晴らしい点です。伝道の仕事全般にはもっと独身女性が必要だと思われまますので、彼女が派遣されるように強く要請いたします。

敬具

メアリー・フローレンス・デントン

1. Gordon, Marquis Lafayette (1843-1900) アメリカン・ボード宣教師。1872年来日。1879年から1899年まで同志社神学校で教えた。1886年、二度目の帰国の折にゴードンの子供たちの学校の教師をしていたデントンと出会い、アメリカン・ボードのクラークに紹介した。夫人は Agnes Helen Gordon (1852-1940)。夫と共に1872年来日し、1899年夫と離日。1900年夫と死別するが、結婚して日本にいた娘たちを頼って1901年再来日して伝道活動に従事する。1940年離日。【*Asphodel* 49, p.102及び p.105参照】
2. M. L. ゴードンの次女 Mary Duke (1881- 没年不明)、日本聖公会北東京地方部主教で立教学院総理そして総長でもあった Charles Shriver Reifsnider (1875-1958) と結婚。
3. M. L. ゴードンの長男 Donald Gordon (1877-1923)。
4. ゴードンの3回目の休暇は、1891年6月から1892年10月。
5. Mr. & Mrs. Bartlett Samuel Colcord Bartlett (1865-1937) 宣教師、ダートマス、アンドーヴァー神学校卒。夫人は M. L. ゴードンの長女 Fanny Slater (1874-1963)。
6. Richards, Linda Ann Judson (1841-1930) アメリカで最初の有資格看護師。1886年職を辞して来日する。京都看病婦学校、同志社病院において宣教医ペリーと日本における近代看護の発展に大きく寄与した。【*Asphodel* 49, p.106参照】

〈バートン書簡 B-2〉【阪上敦子 訳】

1897年 2月 1日

拝啓 デントン様

12月14日付のお手紙でゴードン夫妻からお申し出があった帰国について¹、詳しく、そして率直に書いてくださって御礼申し上げます。もしゴードン博士がこの前の集会で出された委員会の決定、その写しは私から博士に送ってあるのですが、それをあなたにお見せすれば、前便にあったあなたご自身からの提案とほぼ同じですので安心されることでしょう。ただその決議はあなたからの手紙を受け取る前に下されたものですが。博士のお働き、彼の気高い精神、まれに見るすばらしい判断力、幅広い影響力の重要性については私も最初から感じておりました。そしてその彼をこの時期〔同志社がもめているこの大変な時期〕に日本から失うことはできません。彼と夫人が少なくとも当座は残って頂けて、もしお二人のアメリカへの帰国が今年不可欠なら、〔その後は〕すみやかに〔日本に〕戻って仕事を続けて頂けることを強く願っています。

コネチカット州ハートフォードのリチャーズさん²については、ご本人からは何の連絡もありません。もし宣教師に志願されるようなことがあれば、ウーマンズ・ボードがどうするのか私には分かりません。でも、看護師としての専門職をやめて、神が定められた仕事に就くために一般の宣教師として日本へ行く意思がおありなら、彼女から志願して出発して下さるのは大変嬉しいです。実際に、専門分野ではない一般伝道のためにそこハートフォードでの地位を捨てるのは、かなりの犠牲を強いることに他ならないでしょう。リチャーズさんの病院経験が日本での様々な分野のお仕事できっと役に立つことでしょう。ハートフォードに行く機会があればお会いして来ますが、今のところ、すぐにはそちらへ行く用事はありません。先ずあなたから彼女に手紙を書いて、計画や目的について詳しく、そして率直に私に知らせてくれるように頼んでくれませんか。そうすれば、こちらからリチャーズさんと連絡を取るこ

とは出来ずから。すぐに勧誘の用意が無い限り、こちらから先に手紙を出すことは普通しませんので。今のところ、すぐそうするほど彼女のことは知りません。でも彼女からの手紙があれば、ボードが彼女に何か特別なことを約束したという印象を与えることなくこの件を私たちは進めることができるのです。でも状況が許すなら、我々は一般伝道の仕事で日本に行ってほしいのだという理解の下で、リチャーズさんから連絡が欲しいのです。

この冬にかかわっておられる特別な仕事について、近々お話をお伺いできることを願っています。どうぞそれについて詳しく書いてください。この情報はどれもすべて有用ですし、書いて頂ければ心から感謝いたします。

敬具

ジェームズ L. バートン

1. ゴードン夫妻の帰国の事情は [146] に詳しい。
2. リチャーズ 前出 (146)

〈デントン書簡147〉【阪上敦子 訳】

〈バートン書簡 [B-1] への返信〉

日本 京都 梨木町

1897年2月3日

拝啓 バートン博士

11月20日付¹のご親切なお手紙を有難うございました。お手紙を受け取る少し前にこちらからもお出ししていたしましたので、返事をしばらく控えておりました。とは言え、目を通さねばならない手紙が山ほどおありでしょうから、私からの手紙がなくても気づかれないうえね。

ボードがゴードン²さんからの依頼にどのように対処されるのか、私たちは非常に気になって待っていますので、ご夫妻が仕事を続けられるような何らかの方法が見つかるようにと祈っております。

特にお伺いしたいのは、京都ステーションがお願いした女性の〔市内〕伝道活動への347ドルの補助金についてご報告がないことです。こちらではこれがないのはミスかと思っておりますし、この補助金についてこの手紙でお知らせがいただけるといいなと期待しています。特に弘道館³に関連してこれは申請されたのはご存じですね。そこでの活動はうまく行っていますが、最良の状態に盛り上げていくには、そこに必要な伝道者がいればもっとうまくいくのですが。今のところ、不利な状況で活動していますので、専従できる伝道者の必要性を痛感しています。今やっているのは、やりがいのある英語のクラス、少人数の翻訳クラス、少人数の聖書のクラス、ひとつは日本語で、もうひとつは英語でのクラスです。それに日曜夜の大勢の出席者、とても熱心な女工のクラス、大きくなってきた日曜学校、これらすべての活動は、もし私たちが継続していけるなら成長するでしょうし、きっと強力な拠点のひとつになるでしょう。そうすれば助成金の一部はステーションの女性宣教師が国内伝道に行くような場合の活動費に充てられることでしょう。

1月には津、久居、波瀬そして山田に行きました。山田にはクリスチャンになってすぐに女学校をやめた生徒がいて、ずっと気になっておりました。彼女は霊的に成長していてとても嬉しかったですし、日々の生活の影響と彼女からの努力により父親もキリストへと導かれて長老派の教会員になろうとしていました（山田には組合教会はないのです）。

津では活動は全く停止していました。よい集会在ひとつありましたが、あえて言うならば、それは町のほとんどのクリスチャンの女性の集まりで、メソジスト派、長老派、聖公会、会衆派の人たちでしたが、皆は口をそろえてクリスチャンのはなはだしい冷たさや、霊の働きが全くないと証をしました。祈祷週間でしたが活動は何もなく、組合派のクリスチャンや他の宗派でも活動はありませんでした。

久居と波瀬ではとても素晴らしい集会有り、人びとは熱心でとてもよい人たちでした。波瀬に宣教師が来て住んでほしいと熱心に頼んでいます。確

かに波瀬は宣教師にはよい土地のようですが、このミッションにはあまりたくさんおりません。過去に宣教師たちによってすばらしい働きがなされたことを色々耳にして興味深かったです。何年も前のデフォレスト博士⁴の写真が波瀬教会に掛けていましたし、彼の名前を多くの人が口にしていました。「あの方は来られるでしょうか」と。

コルビーさん⁵やガードナーさん⁶、そしてパーミリーさん⁷のことも聞かれました。その人たちはガードナーさんが戻ってくることを望んでいたので、それは余り期待できないと伝えると、とても悲しんで失望していました。リチャーズさんが来られるとどんなに歓迎されるかが分かったら、きっと来られると思うのですが。

一般の人たちも聞く耳を持ち始めて、私たちを日本に受け入れたいと切望していると確信しています。さらに、伝道の仕事ほど有望で見込みがあるものはありませんし、ここ京都にはその仕事がたくさんあります。ラーネッド夫人⁸と私とで幼稚園⁹を始めました。ボードの女性たちには近々援助をしてくださるようお願いするつもりです。幼稚園は市内でもとてもすばらしい立地だと思います。とても賑やかな通りの角にあり、地方への往来のため多数が比叡山のふもとの村々へと行き来しています。

バイブル・ウーマン¹⁰や伝道者のために資金があったなら、どれだけ色々なことがそこでできるかはお分かりでしょう。そして幼稚園の助成金がどこから、そして誰から出ているかご存じでしょうか。寄付して下さった方々に手紙を書いて、園児のことやこの仕事のおもしろさについてどうしてもお伝えしたいのです。バートン博士、あなた様にこのように書くつもりではありませんでしたが、チャイルドさん¹¹へ書く予定のことを多く書いてしまいました。私からよろしくとの言葉をつけて、この手紙を彼女に渡していただけませんかでしょうか。こんなにも有能な書記の方々がおられ、お顔も存じ上げていることを嬉しく存じます。お二人が日本にいる私たちのためにしてくださってきたこと全てにもう一度御礼申し上げます。

私がベリーさん¹²の家に4人の女子と一緒に住んでいるのはご存じでしょうか。3人は幼稚園の仕事をして、そのうちの一人¹³は私の〔日本語の〕先生でもあり、助手でもあります。そして他の二人は刺繍などを学んでいます。私たちが責任をもっている3箇所の日曜学校を皆手伝ってくれていて、週に2日は夜に読み書きと算数を6、7人の近所のお手伝いに教えています。

ベリーさんご一家がこの自宅におられないのはとても残念です。お伝えする必要もないのですが、女学校を退去するのが私にはどんなに辛いことだったか、そして今でもこの問題を他のやり方で解決できたらよかったのと思えます。でも決裂を避けるために出来る限りのことをしたのはお分かりいただけるでしょう。女学校の教師たちはもちろん〔同志社〕理事会の同意なくしては何もできなかったのですし、理事会も私たちが同意できるような案を作成しようとはしませんでした。

この手紙の主な目的(ミッションの集会で要請した347ドルの補助金の催促)が見落とされるほどたくさん書きすぎていないといいのですが。この資金なしでどうして十分にやっつけられるか分かりませんし、心からこの資金がくることを願っております。

敬具

メアリー・フローレンス・デントン

日本 京都 梨木町

2月4日〔書簡冒頭では2月3日〕

1. パートン書簡〔B-1〕のこと。デントンからの手紙がしばらくないので、市内伝道などの詳しい近況報告を求めている。また同志社理事会と宣教師との摩擦についてボード本部としての考え方をパートンは述べていた。
2. ゴードン 前出 (146)
3. デントンが1892年に計画した福音伝道のための訓練校・日曜学校のこと。京都府庁の前にあり、名前は当時の同志社校長、小崎弘道から取った。
4. デフォレスト 前出 (145)

5. Colby, Abby Maria (1847-1917) 1879年来阪。梅花女学校最初の専任宣教師として着任。生涯梅花女学校、高等女学校で教鞭を執った。堺教会設立にも尽力。
【*Asphodel* 50, pp.138~139参照】
6. Gardner, Frances Adelia (1849-1930) 米国オハイオ州生まれ。1878年10月26日アメリカン・ボード派遣宣教師として来日。大阪には1878年3月から1887年3月まで滞在、津には1890年3月から1894年2月まで滞在。1899年辞任。
7. Parmelee, Harriet Frances (1852-1933) 1877年アメリカン・ボード派遣宣教師として来日。同志社女学校ではスタークウエザー「校長」と2年ほど共に教える。一時期、家族の看病で帰国するが1891年再来日。津や前橋、松山、明石などでも働く。1922年帰国するが、1924年再度来日。1933年京都で没。
8. Learned, Florence H. (1857-1940) 夫は同志社大学初代学長の Dwight Whitney Learned (1848-1943)。1875年11月夫と共に来日。宣教師夫人として同志社女学校を手伝うが体調不良で何度か帰国。スタークウエザー書簡[236]【*Asphodel* 49】参照。
9. 同志社幼稚園はデントンが1897年(明治30年)京都市上京区出町栴形町に民家を借りて出町幼稚園として開園。しかしキリスト教を取り巻く世相は厳しく、1900年3月に閉鎖を余儀なくされる。そこでラーネッドが寺町今出川下の西側の自宅内に私費で園舎を建築、9月に今出川幼稚園と改称して再開する。
10. バイブル・ウーマン 前出 (C-16)
11. Child, Abbie B. (1840-1902) マサチューセッツ州ローウェル生まれ。1870年から1902年に亡くなるまでウーマンズ・ボードの書記(Home Secretary)を務める。機関誌『女性のための生命と光』(*Life and Light for Woman*)の編集者でもあった。
12. Berry, John Cutting (1847-1936) アメリカン・ボード派遣の眼科が専門の医療宣教師。1872年来日し、神戸、岡山、京都で医療伝道に従事。新島襄と共に同志社病院を設立して院長になるが、医学校設立はならず病院と看病婦学校を運営。1893年帰国、その後はマサチューセッツ州ウースターで医院を開業し、88歳まで現役であった。
13. 松田幸のこと。1894年、同志社女学校普通科第11回卒業。デントンの助手・通訳として鳥取に同道する。1898年渡米、ボストン音楽学校へ進学、さらにバルリンでピアノを勉強。帰国後、荒木和一と結婚。生涯デントンを支える。